

## 2014年エジプト大統領選挙における 政府の報道への干渉とメディアの報道姿勢

西舘 康平

『Asahi 中東マガジン』2014年7月29日掲載

5月28日をもってエジプトの大統領選挙が終了した。6月3日には、アブドルファッターフ・スィーシー前国防相が、左派のアフマド・サッバーヒー候補者との競争の末に勝利したことが発表された。6月4日には、ホワイトハウスが「アメリカ合衆国は、エジプトと共有する「多くの利益」と戦略的パートナーシップを進めるために、スィーシー大統領との協力を期待する」との声明を発表した[the White House, 4, Jun, 2014]。その他、ロシアはもともとスィーシーの大統領選出馬を支持しており[al-Jazīra, 13, Feb, 2014]、イギリスも彼の当選を支持する姿勢を示している[al-Jazīra, 4, Jun, 2014]。その結果として、選挙結果には国際社会から一応の「正統性」を与えられ、スィーシー大統領は本格的な政権運営を開始した（最近、共和国決議が発表された。詳細は [ここ](#) を参照してください）

しかし、上のホワイトハウスの声明、および人権団体や選挙監査団体の声明によると、事情は異なる（例えば、[the New York Times, 20 May, 2014]）。選挙期間中、治安部隊や軍によるジャーナリストの拘束や殺害が行われ、メディアの報道ではスィーシー候補者の勝利を謳う予定調和が氾濫したという。

本レポートは、選挙の「公正さ」や「平等さ」、報道の自由などの順守といった基準に基づいて今回の選挙の正誤を測ることを意図していない。その目的は、選挙プロセスにおいて、先に挙げた二つのことがどのようにして展開してきたかを具体的に説明する、というところにある。

\* \*

まず、政府による報道社への干渉は、抗議活動を取材するジャーナリストの軍や警察による逮捕や殺害という形で表出した。政府による組織的な情報統制（新聞社幹部層に対する直接的な脅迫や「指示」など）が行われたかは定かではない。また、仮に情報統制があったとして、国内と国外のメディアによって統制の仕方に違いはあるのかなど、不明な点が多い。しかし少なくとも、スィーシー候補者が新聞社への圧力を黙認していたことは指摘できる。

ジャーナリストの拘束の中でも有名なのは、アル=ジャズィーラの Peter Greste 氏や Muhammad Fahmy 氏といったジャーナリストが拘束されたことだろう。前者に関して言え

ば、2013年12月に拘束されている。政府の報道への関与は今年の時点で既に始まっていた。

彼らの拘束は、テロ組織に指定されたムスリム同胞団との関係性、あるいは「間違ったニュース」の報道という名目で行われた。上記のジャーナリストのうち、Peter氏とMuhammad氏には懲役7年の実刑判決、その他、Baher, Muhammad氏にも懲役10年の実刑判決が下されており、エジプトにおける報道の自由が損なわれていると報告されている[Freedom House, 23, Jun, 2014]。

政府の干渉はエジプト国内のジャーナリストにも向けられた。ムルシー前大統領の支持母体であった自由公正党所属のカメラマンやエジプトの『アフバール』紙の記者などが殺害されている[al-Jazira, 25, Jun, 2014]。

今回の選挙関連の報道を見る限り、そこにはムバーラク政権下と同程度（あるいはそれ以上）の、政府によるメディアへの干渉があった。これを受けて、政権を批判するような意見は報道の場から排除され、エジプト国内のメディアの報道は、スィーサー候補者一辺倒となり、全体主義的な状況化に置かれることになる。こうした状況下において、彼の勝利を最も声高に叫んだ新聞社が『アフラーム』紙だった。

この新聞社は、エジプト最大手の日刊紙の一つだ。もともと、エジプトでは自由な報道は完全に保証されてこなかった。この日刊紙も、かつては政府の代弁者と呼ばれ、ナセル政権下において事実上の国営化を受けて政府の統制下に置かれた。政府の見解に報道内容が左右される傾向は、サーダート政権、ムバーラク政権でも続いた。

しかし、2011年の「1月25日革命」を機に、同紙と政府間の腐敗の根絶と、報道姿勢の是正が目指された。当時はムバーラク前大統領や全政府関係者の裁判が続いており、その一環として同紙とムバーラク政権間の汚職事件が取り沙汰されることになる。「悪」はあくまでムバーラク政権側で、アフラーム紙側は罪に問われなかった。

汚職事件の中で最も注目されたのは、献金問題だった。例えば、アフラーム紙がムバーラク政権下の政府関係者10名に対して献金していたとして、受領した関係者数十名が最高検察庁に書類送検されるほか渡航禁止措置を受けている[al-Ahrām, Jan, 5, 2013]。また、最高検察庁は、ムバーラク前大統領が、2006年から2011年の間、毎年700万ポンド（日本円で約1億円）を同社から受領した容疑で彼を15日間拘束すると発表した[al-Ahrām, Jan, 6, 2013]。加えて、ムバーラク前大統領とその家族がアフラーム紙の資本から1800万ポンド（日本円で約2億8千万円）得たことに関して、ムバーラク前大統領がその全額をアフラーム紙に対して支払うとの報道がされた[al-Ahrām, Jan, 14, 2013]。

旧政権側に対する法的措置が実施され、同紙は政府の管理の範疇から脱すると思われた。しかし、アフラーム紙は、各人の意思や主張はどうあれ、組織として見た場合にあまり変化していないといえる。というのも、アフラーム紙取締役アフマド・ナッジャール氏は5月上旬、つまり抗議活動やジャーナリストの拘束などが行われていた最中、治安部隊を管

轄するイブラヒーム・マフラブ内務相と共に「世界報道の自由の日」を祝賀しているからだ[al-Ahrām Weekly, 8, May, 2014]。

アフラーム紙の経営陣と職員間の相克もある。これを端的に示すのが、同市職員による抗議活動だ。7月10日、アフラーム紙の記者や職員がナッジャール氏の退陣を求める抗議活動を彼の事務所の前で行った。その原因は、経営の失敗、縁故雇用（例えばナッジャール氏の姪っ子のアフラーム戦略研究所職員への任命）、ムバーラク政権最後の首相であるアフマド・シャフィークの同紙の役員任命などだという[al-Tahrīr, 10, Jul]。また、2013年の「6月30日革命」直後に同紙の編集長に任命されたムハンマド・アブドゥルハーディー・アラーム氏が国家の責任者に同紙を従属させたとして、抗議活動が行われている[al-Tahrīr, 10, Jul, 2014]。

上で紹介したように、アフラーム紙は記者や職員と経営陣に分裂している。同紙の上層部と政府との関係、そして現場の記者が政府から受ける圧力、これら二つのことが顕著に反映されているのは、言うまでもなく同紙の社説だろう。

\* \*

スィーサー候補者を圧倒的な勝者とみなし、サッバーヒーを「嘔ませ犬」のように取り扱う報道姿勢は、大統領立候補期間（3月30日から4月20日）の段階ですでに明らかだった。

大統領立候補期間中のアフラーム紙の社説は、スィーサー候補者の勝利が以下の五つのことから約束されていると明言していた。①軍が彼のバックにいること。②シナイ半島のテロリスト集団を浄化したこと。③「6月30日革命」において国民が彼と軍の関与を求めたこと。④ムスリム同胞団はエジプトの政治の場（議会や政府内部）からいなくなったが、依然として国内は危険に満ちていること。⑤文化、メディア、大学、教育などの機関は機能不全で、軍と警察のみが有効に機能している機関だからだという[al-Ahrām, 13, Apr, 2014, al-Ahrām, Apr, 11, 2014]。

一方、サッバーヒー候補者が勝利すると予想する者は皆無で、せいぜいスィーサー候補者と善戦するだろうとの見通しがされただけだった[al-Ahrām, Apr, 13, 2014]。この論調は、彼が候補者資格を獲得した直後も見られた[al-Ahrām, Apr, 21, 2014]。

在外エジプト人投票が始まる5月15日までの間、両者の選挙活動が行われた。その時の社説では、スィーサー候補者が当選した後に取られる政策や政治運営について予測する論調が目立った。そのためか、サッバーヒー候補者に対する大統領候補者としての関心は払われず、スィーサー政権下における一人の政治家としての彼の役割について述べる社説が目立った。そこで彼に期待されたのは、例えば、次期議会選挙や立法議会選挙における活躍だった[al-Ahrām, Apr, 27, 2014]。

在外エジプト人の投票結果は5月21日に発表された。スィーシィー候補者は29万票を獲得したが、対するサッバーヒー候補者は1万7千票を獲得するに止まった。5月26日の国内投票を前にして、アフラーム紙では、もともとエジプト国民の間であまり素性の把握されていない（例えば [ここ](#) を参照してください）スィーシィー候補者の性格や身体的特徴を描写して彼のイメージを国民に刷り込む印象操作が行われた。以下にその一部を示す。

「丸い顔…生粋のエジプト人顔だ…その肌は、軍の基地で浴びた太陽の光で赤褐色に灼けている…太陽の熱は、彼の血液と彼の存在そのものに浸み渡っている…勇敢さと民族主義的熱狂さは、彼の内と外の様相の中で最も突出したものだ…口元の静かな微笑みは、彼の口数の少なさを物語っている…その口は、絶対に秘密を洩らさないよう、真一文字になっている。また彼の真っ直ぐな眼差しは、恥ずかしがりや、ロマンチスト、理性を併せ持つ野生さといった彼の隠された性格を雄弁に語っている。すなわち、彼は、自己犠牲を厭わない崇高な騎士なのである…」 [al-Ahrām, May, 22, 2014]。

特筆すべきは、アフラーム紙の報道において、サッバーヒー候補者が上記のような扱いを受けなかったことだ。

国内投票は当初5月26日から27日の二日間にわたって行われる予定だったが、1日延期されて28日に終了した。選挙結果は、アフラーム紙の予定通りスィーシィー候補者の圧倒的な勝利によりその幕を閉じた。アフラーム紙の社説は、透明性と中立性を担保されて選挙が実施されたとし、その要因を四つ挙げている。第一に、有権者に対するカネ、贈り物、油、砂糖、コメ、バターが提供されなかった。第二に、選挙キャンペーンにおいて、政治政党による動員などの選挙活動が行われなかった。第三に、投票における不正（同一人物による複数回の投票、投票用紙のコピー）がなかった。第四に、国営メディア（新聞、ラジオ、テレビ）などの国家機関の完全な中立性が保たれ、治安機関による投票所の警備が行われたからだという [al-Ahrām, May, 31, 2014]。

上記の社説では、両者の勝敗を分けた要因を選挙マニフェストや候補者の言説に沿って説明している。サッバーヒー候補者が敗北した理由は、安定、将来的不安の払拭、治安を脅かすデモの禁止などの精神的安定を求める国民の声をくみ取れず、「1月25日革命」や「6月30日革命」の抗議活動の中で言われた「自由」や「社会公正」といった、変化を追求する形で選挙キャンペーンを行ったことだとした [al-Ahrām, May, 31, 2014]。

対するスィーシィー候補者の勝利は、「6月30日革命」において果たした軍の元帥としての役割や「テロリスト」に指定されたムスリム同胞団などのグループの駆逐に裏打ちされた実行力と思考力を兼ね備える人物というイメージによって約束されたとされた [al-Ahrām, May, 31, 2014]。

スィーシィー候補者の勝利という予定調和は、他の報道社でも見られた。それは、「共

和国大統領になる見込みのある候補者」という文言に見られる。例えば、民間の日刊紙である『マスリー・ヤウム』、反独立系の『アフバール・ヤウム』、日刊紙の『ヤウム・サービウ』などだ。また政府系では、『ジュムーフーリーヤ』でもスィースィー候補者一辺倒の報道が見られた。

\* \* \*

アフラーム紙、および他の新聞社の報道がスィースィー候補者一色になるまでには、彼が治安部隊や軍によるジャーナリストの逮捕や殺害について黙したことで、政府や軍に批判的な意見が排除された経緯がある。

スィースィー大統領を支持する声があること自体には何ら問題はない。何がしかの意見をもち、それを何らかの手段を用いて外に出すか出さないか、それは、最終的には、個人の決断にかかるところだ。今回の選挙結果に国内外の批判が起きていることはすでに書いたが、こうした批判が起こった原因の一つは、選挙期間中のメディアの報道という舞台上、多様な意見を引き合わせるシーンが設けられていなかったところにあるだろう。

メディアからの反体制的な意見の排除を助長したのが、新聞社の経営陣と政府間の密な関係だ。今回は、このことを、「世界報道の自由の日」をアフラーム紙取締役アフマド・ナッジャール氏が内務相と共に祝ったことや、アフラーム紙の職員による抗議活動を例にして紹介した。

スィースィー候補者に集中した全体主義的な報道は、単に政府対メディアという二項対立的な関係のもとで展開したわけではなかった。それは、アフラーム紙に限って言えば、政府、アフラーム紙の記者や職員、そして経営陣という三角関係のもとで繰り広げられた。

現在、エジプトでは議会選挙や立法議会選挙の準備が着々と進んでいる。今後も、今回の選挙のような政治の重要な局面において、断片的でありながら、さも真を語るような報道が、国内外に向けて発信されていくのかもしれない。

(c) 西館康平